

二〇二二年六月二七日（大和郡山参加者二人）

辻曲る度金魚田の水にほふ	菜々
花の如琉金潜る鉢の底	"
歌麿の絵も金魚田の資料館	"
遠山へ金魚田続く城下町	"
路地涼し条理正しき城下町	"
紺屋町つらぬく小川音涼し	"
万緑へ跳ねる鯨門櫓	"
古町を抜けて金魚田広これり	ひかり
城壘のさかさ地蔵に梅雨暗し	"
くちなしの香に満つ寺領たもとほり	"
鎖せる天守台へと草茂る	"
吟行子金魚すくひに寄り道す	きづな
風涼し金魚模様の藍のれん	"
水槽の出目金と目が合ひにけり	"
老鷺や極楽橋を渡るとき	百合
琉金の舞ふに心のおそびけり	"
墨寒しさかさ地蔵の天地かな	"
出荷場のプールひしめく金魚どち	せいじ

骨太の腕もて掬ふ金魚売

古城址の荒れし石垣草茂る

金魚田の稚魚抜け出せる用水路

格子戸の路地に金魚田見え隠れ

万緑を砦としたる城址かな

尻ふって高級金魚ひるがへる

金魚田の間に青田の郡山

古町を貫く紺屋川涼し

出荷待つ千の金魚のさざめける

金魚柄染めて紺屋の麻のれん

吟行句会みの選

二〇二二年六月二七日（大和郡山参加者二人）